

Labo.Cafe#24 旅する本箱お帰りなさいの会 記録

日時：令和6年12月18日（水）14時～16時30分

場所：県立長野図書館3階 信州・学び創造ラボ

参加者：宮西さん/JR東日本中込駅

新井さん/長野県立大学、ゲストハウスフルマチ邸

高橋さん/飯山赤十字病院

田中さん/Re:Public (ZOOM参加)

井上さん/2 space

高梨さん/長野県障がい者福祉センター サンアップル

本間さん/長野市立長野図書館館長

小山さん/長野市立長野図書館

千々和さん/Learn by Creation

佐々木さん/Learn by Creation

森・丸山・樋賀・干川・内川・池田・畠山/県立長野図書館

※以降、敬称略



概要説明・自己紹介

本日のプログラム



- ・開会・趣旨説明、各旅先からの状況報告
- ・リーフレット案デザインコンセプト説明、次の旅について意見交換

「旅する本箱」とは (森) [\(資料 PDF\)](#)

旅する本箱は、Learn by Creation NAGANO (LXCN) と県立長野図書館の共同プロジェクトです。何種類かの本箱が、何箇所かの場所を巡るコンセプトの企画で、初回は4テーマ4箇所で令和5年度から始まっていますが、実は本が旅するというアイデア自体は2022年8月に生まれていました。ところが図書館の蔵書だと本の管理の問題がクリアできなくて、なかなか始めることができず、LXCNと組むことで実現できたという経緯

がありました。ということで、千々和さんから LCN について概要をご説明いただければと思います。

Learn by Creation NAGANO¹の紹介（千々和）

一般社団法人 Learn by Creation が東京にあり、長野県庁との協同事業で、Learn by Creation NAGANO が設立されました。実行委員形式で、様々な分野から 7 名のメンバーに参加いただいている、県立長野図書館の森館長もその一人です。県からのトップダウンではなく、県民が独自に考え実行し、学びの関係人口を増やすことに取組んでいます。

例えば、先週は松川町にある学校でルール作りのワークショップを行い、校則やルールは自分たちで作れるということを総合学習で学んでもらいました。



(森・つづき)

千々和さん、ありがとうございます。図書館も広い意味で「学びの場」です。旅する本箱によって、本を介绍了人の「つながり」、いろいろなタイプの旅先さんと「まじり」ながら「共創」ができているのではないかと思います。

旅する本箱に入れる本には、テーマごとに選定者が選んだ理由がメモされています。それに対して読んだ人もメモを追加でき、人ととのつながりを演出しています。旅先で起こったかの記録や本の管理のために、各旅先にノートも設置しました。ノートは各旅先の色をイメージしています。初めての試みで後から思いついて追加したことがあつたため、運用が徹底していない部分もありました。

人が本のある場所に動くのではなく、本が動いていく。自分の日常の場所に本が来ることで、自然に本に接することができる。積極的に本のある場所へ行かない人（行けない人）の日常に本を届け、自分では選ばないような本と出会うことができる。他の人の感想が見られて、自分のアクションが他の人に伝わるわくわく感を期待しました。

本箱のテーマを決めるプロセスもオープンにするため、2023年10月にテーマを考えるためのイベント（[ラボカフェ「旅する本箱のテーマを考える会」](#)）を開催しました。各所に依頼し、約30人が本を選んでくれました。本は紛失の恐れがあるため、透明のブックカバーをかけ、ラベルをつけることにしました。そこで、[ラボカフェ「旅支度の会」](#)として集まり、推薦した人のメッセージを貼ったり、ブックカバーをかけたり、皆でわいわい準備しました。呼び水にするための、感想の書き込みもつけました。

当初は1か月ごとに旅をする予定でしたが、2か月くらいあったほうが良いという意見を受け、最終的に11月に戻ってくるというスケジュールになりました。

¹ <https://nagano.learnx.jp/>

運送は、日本通運さんが御協力してくださいました。たまたま、担当の方が「旅支度の会」に参加してくださったことを縁に引受けくださいました。

企画を開始してから、この企画に興味を持ってくださったデザイナーの井上さんが、ロゴの作成を提案してくださいました。後ほど、リーフレット案への意見を伺いたいと思います。

予想通りでなかったところも含めて、どうすれば交流が活性化するかも考えられればと思っています。

各旅先からの状況報告

【JR 東日本中込駅／東信・佐久市】(宮西) [\(資料 PDF\)](#)

中込駅は、小海線の中にあります。所在地は佐久市中込。開業は大正4年8月4日。昭和20年代に建替えられて現在の駅舎の形になりました。

小海線は標高が高い線路として有名です。中込駅は673.4mです。長野駅の標高は360m。日本全国のJR線で一番標高が高い地点は、野辺山駅の近くで1375m、野辺山駅は1340mです。高原の中を走ることから「高原鉄道」と言われます。



本箱は、待合室の中に設置させていただきました。使用していない本棚を出し、表紙ができるだけ見えるような形で設置しました。集中しすぎて電車に乗り遅れないようにしましょう、というポスターを設置しました。

中込駅は、列車が1時間～30分に1本しかない駅です。普段は学生が多い駅です。これまで、待合室でスマホをずっと見ている方が多かったのですが、本を見ている人が多くなりました。電子書籍を見ている人もいると思いますが、紙をめくる楽しさ、本の魅力を伝えることができたと思っています。

駅は同じ方が使うことが多いので、『銀河鉄道999』のような長いシリーズものを読み進めていく姿が印象的でした。

「旅する本箱」の、本が移動してくるというコンセプトが良いと思いました。普段自分ではなかなか選ばないジャンルの本を、待ち時間で手に取る楽しみがあったのだろうと感じました。

【フルマチ邸／南信・松川町】(新井) [\(資料 PDF\)](#)

南信地域のゲストハウスフルマチ邸で受け入れ先としてお世話になりました。

かなり南の方で、長野市までは2時間近くかかりますが、岐阜県までは40分、名古屋まで1時間半ほどの県境です。

地元の松川町図書館は、小学生から大人までみんなで一緒にクラフト的な活動を行っています。デッドスペースになるような柱を活かして



本を並べたり、名産であるりんご型の本棚を作ったり、ゆっくり休めるベンチを作ったり。ハウスインハウスのような場所で、高校生がおすすめ本を紹介してくれる活動もあります。

ゲストハウスフルマチ邸は、約 100 年前に建てられた古民家をリノベーションして宿泊場所にしたところです。蔵が実際に泊まれるスペースです。本箱は母屋に設置しました。母屋は宿泊客だけでなく、地元の皆さんとのコミュニティスペースや、大学生・高校生が毎月イベントに使っています。最初のテーマである「今日、何食べたい」は、長野県立大学の食健康学科の子によるコミュニティキッチンの企画を実施するタイミングだったので、ちょうどいいなと思いました。薪ストーブとソファーを囲みながら皆で読む、という形になりました。

自分でもいろいろ活動しました。本箱を独自に作ってみよう、ということで、若い人たちと取組みました。旅をするので、ポータビリティがあったほうがいいということで、小さめの本箱にしました。松川町の森で伐ったヒノキを使いました。ゲストハウスにおいては届かない人がいるだろうということで、4 かいほど出張して設置しました。イベントや文化祭、南信州広域連合の移住企画によるラジオ「づくりラジ」の生配信、「マツカワたがやすかいぎ」のステージにも持っていました。

この企画に共感する方がたくさんいらっしゃいました。本が好きな伊奈北高校生は、本を使った企画を実施予定です。東京・千葉を拠点に活動する移動科学館 Science a GoGo 代表の松元理沙さんは、科学館の移動に合わせて旅する本箱を連れていきたいそうです。どんぐり文庫さんはシャッター街になっている商店街の一角を使った小さな文庫で、オーナー候補としてやりたいというお話をいただきました。

「旅する本箱」というネーミングは自由に使ってもいいのでしょうか？

(森)

ぜひ使ってください！実は、当初「旅する本棚」というネーミングを考えたんですが、JTB さんが使っておられるんですよね。それで「旅する本箱」になりました。例えば、岡谷市の図書館長さんがキャスター付きの本箱を作られて、学校の教室を旅する本箱を始められました。「こうでなければならない」ということはなくて、コンセプトに賛同してくださる活動なら、自由に使っていただけたらと思います。

【飯山赤十字病院／北信・飯山市】(高橋) [\(資料 PDF\)](#)

病院と図書館は意外と相性がよく、大きな病院は、医学の学術文庫だけでなく、入院患者さんや外来患者さんのための図書室がある病院が多いです。

松本の信州大学附属病院は、1 階のカフェの隣に「こまくさ図書室」があって、松本市図書館の分館になっていて、司書がいて図書が多数あります。

長野市若里では、同じ病院グループの長野



赤十字病院の2階に「からだの図書館」があります。

飯山赤十字病院では図書室を作るまではできないので、声をかけていただきありがとうございました。

飯山赤十字病院は、戦後まもなくできた病院で、71年目を迎えてます。

病床数は284床、コロナなどの影響で、実際に動いてるのは224床です。

外来患者さんが1日300人ほど訪れ、入院患者さんが毎日大体190人ぐらいいらっしゃいます。入院は病院内でしばらく生活します。その中で、自分では選ばないテーマの本が置いてあるっていうのはとても良いと思い参加させていただいてます。

長野県にある病院で、最北端にあるのが飯山赤十字病院です。長野市から北に約30km。県境にあるような病院はへき地医療も担っているので、面積は広く人口密度が薄いため、経営は非常に厳しく、公立病院が役割を担っています。

南の一番下にあるのは県立阿南病院。その南西にあるのは県立木曽病院です。

日本赤十字社とは特殊法人ではありますが、民間ですので、使命を背負いながら医療を続けています。

長野市より北の行政権を北信地域といいます。北信地域もさらに2つに分けられ、高社山を境に岳北・岳南と言います。岳北は飯山・木島平・野沢温泉・栄村。冬はスキーのメッカで、高齢化率が40%を超え、全国より10ポイントほど高い地域です。入院患者さんの92%が70代以上。20~30代や小中学生の患者さんはほぼ目にしないのが特徴になってます。立地は飯山駅から徒歩3分ですが、高齢者の方は歩いて来られません。岳北の2万7000人の住民に対し医療を行っています。同規模では南佐久郡2万2000人、木曽郡2万3000人です。赤十字病院は社会的使命が非常に高い中で営業しています。

「旅する本箱」の設置場所は1階です。約30年前に建替えられました。当時は外来の患者さんが1日1000人来していましたが、今は300人です。

エントランスホールの大空間ですので、色々な使いができるスペースで、コロナ前は講演会やワークショップをやっていましたが、病院は未だコロナ体制なのでできていません。今はクリスマスツリー、季節によっては雛人形などを飾る一角に設置しました。

最初に展示した時は、あまり表紙を見せる展示ではありませんでしたが、関心を持ってもらうために、表紙を見せる展示にして、毎週入替えています。

読売新聞に取材記事を書いていただきました。

毎年、患者満足度調査をやっています。図書コーナーも評価項目にあり、満足度が低い弱点でした。しっかりとした図書室がなく、本の入替えも難しいため、「旅する本箱」で入替えできる仕組みが作れたと思います。

待ち時間についても調査しています。外来・予約患者で待ち時間が違い、1時間あるとスマホに勝てません。しっかりと読むより、ぱっと見る人が多く、1話が短いものが手に取られやすい印象です。長い本は入院患者さんが病室へ持込み、行方不明になっているときもありました。

満足度調査では雑誌・漫画が求められていましたが、病院には漫画がふさわしくないという暗黙のルールがあり、漫画を撤去することもありました。「旅する本箱」には、『銀河鉄道999』や写真集があり、手に取られていました。

高齢者が多いことから、健康に関するテーマがあるとよかったです。

今回の企画をきっかけに、飯山市図書館へ出かけたところ、除籍本を提供いただけることになりました。

電子書籍「デジとしょ信州」が法人会員として使えると嬉しいですが、著作権の関係で難しいんだろうなと思っています。

(森)

「デジとしょ信州」を、施設ごとの ID で使えると良いなという希望はいただいているんですが、サービス事業者さんにご相談したら難しいということでした。なるべく、「デジとしょ信州」の利用のハードルを下げる工夫はしたいです。

リーフレットデザインコンセプト紹介（井上）[（資料 PDF）（リーフレット案）](#)

情報デザイン分野で、フリーランスでデザインをしています。

情報デザインは、見えない、伝えたい何か、情報をモノや形にするというデザインです。特にピクトグラムやサインを作成しています。

今回は「旅する本箱」とすぐに分かるように、旅行カバンをイメージして作成しました。旅行カバンに、取っ手としてタグを付けて「旅行」感を出しました。公共のピクトグラムと並んだときに調和するように、シンプルにデザインしました。タグの部分に旅先の場所を入れる、カラーやパターンを本のところに入れるなど、バリエーションが作りやすいようになっています。



リーフレットは、最初にヒアリングして出てきた情報をまとめて作りました。

本箱の旅先情報、企画の目的、旅先候補の募集、置いている本の情報、企画のテーマとねらいを掲載しました。

リーフレットの役割は3つあると思っています。使い方を知ってもらう。作成のストーリーを知ってもらう。参加してもらう。

「使い方を知ってもらう」は、「『旅する本箱』のしくみ」「『旅する本箱』の使い方」の部分です。どういった利用をすればいいかの概要です。見ていただいてわかりにくい部分があれば御意見をいただけたらと思います。

「ストーリーを知ってもらう」は、伺った経緯に肉付けしました。物語として読んでもらいたいと思いデザインしています。長野県では、近くに本屋さんが無かったり、図書館がなかったり、という背景を書きました。

「参加してもらう」部分は、今回練りたいと思っている部分です。

裏のマップ、Q&A は事前に伺ったことをもとに使っています。旅先オーナーの募集、利用者ツールが空白です。

利用者にどうやって参加してもらうか、ということで、リーフレットが役に立てればと思っています。参加しやすそうな機能、困っていることを改善できる機能を入れたい。旅先オーナー募集は、理由や展望を書いていきたいと思っています。

大事な部分はグラフなどにして入れました。

レイアウトは横半分に折って、4つ折りにした形が、コンパクトに持ち運べていいのではないかということで提案します。1枚で使う場合反転させると逆さになるため、今は反転していません。折るのであれば、反転させたほうが見やすいです。

質疑応答

高梨／旅先になりたいと思っています。一番心配だったのは本の管理です。汚破損・紛失は絶対出てくるだろうと思い、心配です。

森／図書館は常に修理との戦いです。「皆が使うものだから丁寧に扱ってね」っていうことはありますが、汚破損は、そうなってしまった時はそうなった時。セロハンテープはかえって本が傷んでしまうので、修理せずに教えてほしいです。

紛失することも想定して、図書館の蔵書を使わず、プロジェクトとしてやっていますので、そこは気を付けていただくよう促すだけでいいのではないかと思っています。

高橋／飯山赤十字病院では6冊くらい失くしています。気をつかったのは、10冊シリーズの『銀河鉄道999』やシリーズ。『ブレイブストーリー』は、上巻が発送日になくなってしまいました。小説は、戻ってくるのに早くても1週間っていうのが経験則だったので、戻ってこないと思い、病院の予算で買いなおしました。発送日の2日前くらいから院内放送をすると、戻ってくることがあります。

森／次の旅立ちの日を書くなどして、発送日までには戻してもらえるといいですね。

今後の展開（森）

令和6～7年度の2か年計画で展開しています。7年度に旅先とテーマを4つ増やして、8か所を旅する予定です。リーフレットは現在の4か所で1回作っていただき、来年度4か所追加して再作成します。

LXCNのプロジェクトとして、事業費（本の購入費、装備などの消耗品、送料、広報ツール費）を出していただいている。各旅先は費用負担をしなくて良いのですが、プロジェクトなので未来永劫というわけではありません。これが今後も続けられれば、同じモデルで続けます。旅する本箱は、本の購入や送料にコストをかけています。

中信の旅先であるRe:publicさんはシェア型の本屋さんで、月々2,000円でオーナーさんが借りるしくみです。旅する本箱の場合は、皆さんのが場所を提供してくださっているので、場所代はかかりませんが、本代と送料が発生しています。テーマや旅先が増えれば増えるほど、コストが増えるモデルなんです。

ただし、本は寄附していただくことも可能だと思っています。例えば、健康についてのテーマの本箱を作りたいので、健康についての本を御寄贈いただけませんかというように、寄附の精神でやっていけるのではないかと考えています。次に、これは妄想レベルの話ですが、直接持つていけるくらい密に旅先が増えると、送料が不要になるのかもしれないと思っていますが、こちらはなかなか一気にはいかないと思います。

ずっと続くかはわかりませんが、当面来年度は実施しますので、とりあえずやってみようかな、ということによければ、ぜひ参加していただけると嬉しいです。

意見交換



森／第2回目の「旅する本箱」の時に、本にカバーをかける取組み²を皆さんとやりました。そこで、御相談ですが、この取組みを他地域の図書館さんも担ってくれると嬉しいと思っています。北信で、障害者福祉センターさんが旅先として声を上げていたので、長野市のよしみで、長野市立図書館さんに御協力いただけないでしょうか。障害者福祉センターさんは、利用者の方にワークショップへ参加いただくことは可能でしょうか。

高梨／募集をかけて、ということでしたら可能だと思います。

小山／申し訳ないですが、ギリギリの職員体制で回しております。私も仕事を前倒ししてここに参加する時間を作りました。資料室の職員も常に手が足りない状況で、イベントに参加する時間の分の仕事は、どこでやるんですか、という状況です。私は障害者ライブラリで業務をしていますが、ボランティアさんとの打合せ、例会、資料作りなどの業務があります。平日でも来館者が多く、窓口業務もあります。時間を捻出するのが難しいです。

森／ありがとうございます。広報しあうなど、無理がない連携をしたいと思います。

小山／選書のお手伝いはできると思います。テーマが決まっているのであれば、少しはお手伝いができると思います。

障害者ライブラリの観点から言うと、晴眼者向けの棚だと思います。本がめくれない人のための録音図書があってもいいです。晴眼者向けに紹介するという視点で、点字つきの本を置いてもいいと思います。

² Labo.Cafe#22 旅する本箱#2 旅支度の会

https://www.knowledge.pref.nagano.lg.jp/now/news/labocafe_240118.html

LL ブックという、本が読みづらい方向けの本もあります。そういう本があると、感想も書きやすいのではないでしょうか。

本間／全市町村に広がっていくとすると、今年やっていたところが来年なくなる、ということに懸念を感じます。継続性が担保できないと、身近な市町村へ問合せが来てしまう。市のサービスに、施設に本を貸し出すサービス、移動図書館もありますので、そことの兼ね合いもあります。

まちの本屋さんこともあります。身近な本が増えることで、本への親しみが増えるかもしれません、図書館に本があると本が売れない、ということと同じ議論が起るかもしれません。

県で実施するのはいいですが、市町村へおろすのであれば、そういうことを検討する必要があると思います。役所の仕事ではなく、いろいろなプレイヤーがいる事業としてやるのがいいのではないでしょうか。

長野市民病院は今まであった図書室が、コーヒーショップに変わってしまいました。長野市の中央通り管内だけでも、多くの書店がなくなってしまいました。本との付き合い方が難しい時代です。

森／読書バリアフリー関係の本は、ぜひ入れたいと思います。

LXCN との共同事業であり、プロジェクト的な位置づけであると考えています。

書店さんとは、共存共栄のひとつの手段にしていただけたらと思っています。本箱が移動していくので、続きを読みたいかったけれどなくなってしまう、読み始めたら面白かった、続きを読みたいということで、購買行動に繋げていけたらと考えています。

佐々木／「旅する本箱」は、県立図書館では難しいがやってみたい、ということで、LXCN のスキームでやっている事業です。

やりたい、価値があるけれども、組織としては関わりづらいという企画があれば、このような形のスキームにのせてもらえたとします。ご説明いただいたバリアフリーの本棚、広めたい・存在意義を伝えたいということなど。

森／バリアフリーの本棚は、世界中で「りんごの棚³」というネーミングで展開してるんですね。県立長野図書館にもあります。先ほどりんご型の本棚もありましたが。言葉がマッチしていて、うちにも置きたいなと思いました。

自分自身に必要性がないと関心が向かないかもしれません、身近な場所にあれば、家族や知り合いにとって読みやすいかも、と気づけるきっかけになる可能性がありますよね。

小山／そうですね。「りんごの棚」はそういう目的もあり、障害者本人だけではなく、一緒に過ごすの晴眼者への広報もできます。

³ Apple Shelf Project <https://appleshelf.jp/>

学校図書館では工夫を凝らした展示が多く、そういうところから興味を持つきっかけになることもあります。

りんご型の本棚に「りんごの棚」の本が入るといいですね。

本間／私のような、図書館長が前面に立つと啓発色が強くなってしまうので。今日のようには、いろいろな方が進めていく方が、広がっていくような気がします。

森／本箱作りについて。林業総合センター⁴で、関係者がボランティアとして、本選びやワークショップに参加してくれました。林業総合研究所にある木材で本箱が作れたらいいねという話がでました。県産材木材の強度テストで、圧力をかけてヒビが入った木材が、立派なものなのに廃棄するしかないそうで、その端材で本箱が作れたらいいね、という話がでていたんです。製材に課題があり進められていませんでしたが、加工のノウハウがある方との関わりがあるんですよね。

新井／デジタルファブリケーション、パソコン上で設計しています。製材は、飯田市のヤマキチ木材⁵という製材店へ相談して、何度かプロトタイプを作り、強度や重さを確認し、3か月くらいかけて作りました。

千々和／せっかくだからりんごで本棚を作って、テーマのいくつかには、「りんごの棚」の本にりんごシールを貼ったものを何割か入れては。

森／既存のテーマの本も、このまま固定でなくともいいと思っています。なくなってしまった本もあるので、「りんごの棚」の本を足すなど。

小山／出版数が限られているので、テーマに沿えるとは限りませんが。大活字本、点字付き絵本など。

千々和／なくても、こういうテーマの本はないんだ、という気づきになるのでは。

小山／オーディオブックや、アクセシブルライブラリーとして出版されるものもありますが、少ないです。

森／「旅する本箱」の近くにデジとしょ信州のご案内を置いたり、旅先さんの近隣の図書館でもいろいろな読書御バリアフリーの取組があると思うので、ご案内できたらいいですね。

小山／図書館の利用案内を置かせていただけるといいかもしれません。

⁴ 長野県林業総合センター <https://www.pref.nagano.lg.jp/ringyosogo/>

⁵ 株式会社ヤマキチ木材 <http://www.yamakiti.jp/>

森／リーフレットで、やることとして「2か月に1度、本を送り出す」ということを追加してほしいです。折り方は個人の好みがあると思いますが、下半分は反転したほうがいいと思います。折りも含めた納品を検討しましょう。

本間／リーフレットはオーナー向けですか、利用者向けですか。

森／両方を想定しています。

本間／ストーリーが読ませるものなので、図書館に置いておくのであれば手に取る方が多いと思いますが、そうなると枚数が必要です。

森／PDF版をホームページに掲載したいと思います。

人が動くのではなく本が動く、というコンセプトの企画ですが、本を追いかけて旅を楽しむ方もいらっしゃるようです。そうすると、ハンディに持ち歩ける案内はいいと思います。

井上／寄贈について、利用者目線で考えると、自分のとっておきの本を旅に出したい、というニーズがありそうです。移動するということの良さを出して、寄贈してほしいということを加えてはどうでしょうか。

森／どんな運用になるか考えたいです。以前、「館長の本棚」というコーナーに私物の本を置いていたところ、たくさんなくなってしまったのですが、「返してくださいね」とメッセージを貼ったら、違う本が置かれていた、ということがありました。

「旅する本箱」の寄贈の方法、急に棚に本が増えていたら、旅先さんたちどうでしょうか。事務局に連絡していただとか、単に置いて行ってもらうか、いかがでしょう。

本間／寄贈は本当にいろいろな本がくるので、ある程度はフィルタリングが必要だと思います。ただ、自分の本が旅をするということは皆さん希望されると思います。長野市で「まちかど図書館」という試みが始まったように、自分の本を見てほしいという思いがある方は非常に多いです。寄付する方は多いと思いますが、玉石混交になりそうなので、整理の仕方は考えておいた方がいいと思います。

森／事務局にお知らせいただく形にすると、寄贈はできるんだ、でも勝手に増やしてはいけないんだ、というメッセージが伝わりそうですね。

私も、ラジオで紹介した本を溜めてあるので、すぐにひと箱寄贈できる状況です。ただ、「旅する本箱」に含めていいのかはどこかで判定が必要です。公序良俗に反するものは入れない、などの基準も必要ですね。

井上／なくなってしまった本があるそうなので、リーフレットに入れるのは難しいかもしませんが、どこかでアナウンスをしてはどうでしょう。

森／Facebook グループがあるので、それぞれのテーマの本の一覧は掲載しています。
そこで情報発信ができるかもしれません。
皆さま、せっかくなので旅本もご覧ください。

帰ってきた本の見学



県立長野図書館「りんごの棚」見学



りんご型の本棚設置・見学

